

シンフォニアテクノロジー株式会社 2021 年度決算説明会 質疑応答(要旨)
(2022 年 6 月 6 日(月))

【回答者】

代表取締役社長 平野新一

Q パワーエレクトロニクス機器セグメントにおけるクリーン搬送機器の、21 年度の対前年伸び率、及び 22 年度の伸び率についてお聞きしたい。

A 20 年度に対し 21 年度は、受注については約 2 倍、売上については約 1.5 倍程度。22 年度に関しては、21 年度並みの受注だが、売上については注残もあるので増収を計画。受注は保守的に見ている。

Q 半導体製造装置については、二桁伸びるとされている中で、横ばいとしているのはなぜか。

A 部材供給難がリスクとなるとみている。また、客先の生産調整や、21 年度に先行発注があったことによる影響を考慮している。

Q クリーン搬送機器の最終顧客をアプリケーション別(ロジック、DRAM、NAND 等)にみるとどれの比率が高いのか。

A どこが強いというのはなく、平均的に納めている。

Q これから多くの半導体製造工場が立ち上がる中で、需要は伸びると考えているものの、今期は堅めに見ているということか。

A その通り。

Q 21 年度から 22 年度に向けての営業利益の増減分析はどのように考えているのか。

A 増収により増益となる要素もあるが、対面営業や海外渡航を積極的に行うことや、開発への投資活発化による費用増を計画しているため、対前年減益となるセグメントもある。

Q 昨年度の工場の稼働率、生産キャパシティはどの程度だったのか。また中期計画において設備投資を行うことで、どのくらい拡大するのか教えていただきたい。

A 21 年度については、工場稼働率は残業、休日出勤も行い、ほぼ上限に近い水準。ただ部品供給において混乱が生じたため、一部生産の平準化ができないという課題はあった。

中期計画においては、自動機の導入や、特にクリーン搬送機器では生産スペースの拡大や増員を行うことを計画し、生産能力を向上させる。

Q 為替の変動影響について、1円当たりの影響額はどのくらいか。

A 対ドル1円円安に振れると、年間60百万円ほどの増益要因となる。

Q 為替の前提はいくらで見ているか。

A 1ドル110円と想定している。

Q 22年度の研究開発費を21年度比で18億円増やすとしているが、どういうことを計画しているのか。

A 外部委託や、大学との共同研究などを積極的に活用することを計画している。

Q 研究開発費は計画を下回るが多いが、どのくらいまでやれると考えているか。

A 当グループにおいても、リソースの問題、技術の構造的課題等の課題があるため、これらをひとつずつ解決し、スピードを上げて取り組み、やり切りたい。

以上